

症例は76歳男性。約8年前に腹部大動脈—両側腸骨動脈Yグラフト施行されている。今回大量下血を呈し来院した。精査の結果、十二指腸水平部に出血源と思われる粘膜の隆起を認めた。一方腹部大動脈 DSA にて、人工血管の中枢側吻合部付近に小動脈瘤の形成を認めた。

開腹手術施行し、人工血管の中枢側吻合部が仮性動脈瘤を形成、十二指腸へ穿孔し大量下血を来したものと判明した。十二指腸壁を一部切除、修復。大動脈縫合不全部は再縫合し手術を終了した。

術後は順調に経過し、現在下血は認められていない。

23) エリスロポエチンによる術前貯血の
開心術時輸血節減効果

篠永	真弓・林	純一	(新潟大学 第二外科)
藤田	康雄・中沢	聡	
上野	光夫・中山	卓	
平原	浩幸・香山	誠司	
江口	昭治		

開心術では多量の輸血を必要とするため術後肝炎、GVHD などの感染症の合併もまれではない。教室では遺伝子組換え技術で生産された recombinant human erythropoietin (rEPO) を成人予定開心術症例に投与し造血能を高めて術前自己血貯血の増量をはかり、希釈式貯血と術中回収洗浄法を組み合わせると同種血輸血節減を試みた。rEPO を術前2週間で 200IU/kg×6回投与し貯血した8例を EPO 群とし、これと年齢・体重が match し、rEPO を投与せずに術前貯血を行った8例を対照群とした。

自己血貯血量は EPO 群で 1323±249ml と、対照群の 876±174ml に比べ有意に多かった。Ht, T.P の手術直前/入院時比は対照群で有意に低下していた。術中、術後の出血量は両群で差はなかったが、無輸血完遂率は EPO 群で 7/8、対照群で 3/8 であった。同種血輸血量は EPO 群で平均 225ml、対照群で平均 775ml であり、1例あたり 550ml の全血が節減された。術後7病日での Ht, Hb, T.P の値は両群で差はなかった。

24) 腎不全、呼吸不全に対する PGE 1 の
使用経験

清水	武昭・長谷川	滋	(信楽園病院 外科)
内田	克之・土屋	嘉昭	(新潟大学)
塚田	一博・吉田	奎介	(第一外科)

慢性腎不全非透析例の開腹手術は、術後血清クレアチニン濃度の急上昇が認められ、透析の用意なしでは不安なものです。最近プロスタグランジン E1 が術中高血

圧の治療に可能となり、腎不全患者に使用し、PGE1 使用群と非使用群とで比較し、腎の保護作用について検討した。原疾患、手術時間など両群に大きな差は無かった。対象例はすべて術後血清クレアチニンの上昇をきたしたが、PGE1 使用例はすべて術前の血清クレアチニン濃度は術前に比較して、低値を示し、腎不全症例でも、透析施設を要せず開腹手術が可能と考えられた。腎や、肝臓の血流量の増加、臓器の細胞保護作用と考えられた。胃癌術後の縫合不全による腹膜炎の ARDS の2症例に PGE1 を使用した。PGE1 使用后、PO2 は著明な改善を見、有効であった。

結論：PGE1 は腎不全、ARDS の治療に有効で、MOF 症例の治療及び予防に有用ではないかと考えられた。

25) 経腹的に閉鎖した Larrey 孔ヘルニアの1症例

飯合	恒夫・三科	武	(鶴岡市立荘内病院) 外科、小児外科)
八木	実・斉藤	博	
石原	良・広岡	茂樹	
鈴木	伸男		

Larrey 孔ヘルニアは、先天性横隔膜ヘルニアの1つで、Morgagni 孔ヘルニアと伴に胸骨後ヘルニアと呼ばれている。非常に稀な疾患であり成人で見つかるのは稀有である。今回我々は成人の Larrey 孔ヘルニアを経験したので報告する。

症例は79才男性で総胆管結石症にて手術目的に当科に入院した。術前より Larrey 孔ヘルニアとの診断がついており、それによる自覚症状は無かったが、総胆管結石症の手術と同時に経腹的にヘルニア孔の閉鎖を行なった。ヘルニア内容は大網と横行結腸であった。術後呼吸機能は%肺活量が 46.15%から 79.29%まで改善、順調な経過をたどり退院となった。

26) 臍帯ヘルニアの治療経験

奥脇	英人・高野	邦夫	(山梨医科大学) 第二外科)
加藤	淳也・石本	忠雄	
毛利	成昭・渡辺	一晃	
中込	博・山寺	陽一	
岩崎	甫・松川	哲之助	
上野	明		

我々は今までに3例の臍帯ヘルニアを経験した。症例数は少ないが、それぞれに興味ある症例と考えられるので治療経過を述べ、若干の考察を加えて報告する。

症例1：在胎39週帝王切開にて出生。体重 2620g。ヘルニア門 5.0×6.0cm、ゴアテックスを用いて Schuster 法により、2週間で腹壁を閉鎖したが、循環不全